

3. ビクトリア法医学研究所 (豪州) における死後CT研修に参加して

吉田真衣子 杏林大学医学部付属病院放射線科

Aiをめぐる社会の流れは速い。今回で第5弾となる本誌のAi特集をたどることで、それは再確認できる。前回(2015年1月号)のテーマは「黎明期から普及期に向けてさらなる展開」、そして今回は、「社会インフラとしてのAiの普及と適切な活用に向けて」とある。わが国においてAiが提唱された2000年以降、2012年の死因究明2法の成立、2014年の医療法改正に伴う医療事故調査制度の成立および2015年10月からの施行、小児死亡事例に対するモデル事業の開始と、社会におけるAiの果たす役割はおそらく関係者の想像すら超える速さで高まっている。一方で、こうした動きに心理的にも実務的にも取り残され気味になっているのが、(死亡時画像診断を専門としない)多くの放射線科医ではないだろうか。放射線科の日々の業務は多忙である。生者の読影で手一杯であるのに、死者の読影に割く時間などあるものかと真顔で言われる機会はさすがに減ったものの、本音の部分にはそれに近い思いが依然として濃厚に沈殿しているのではと想像する。しかし社会の動きは止まらない。これまでの日常業務の上に厄介な仕事が増えると発想する以上、逃げ腰になる傾向はぬぐえないのではないかと。であればここで一度、大きく発想を転換してみたらどうだろうか。と筆者は考える。根本に戻って考えてみる。なぜ、Aiの普及が進むのか。それはそもそも、日本の死因究明制度に破たんがあるからである。この破たんの根っこをたどれば、それはそのまま日本の近代国家としての歴史をひもとく作業になってしまうわけだが、近代国家の根底に保障されている

べき社会の“安全”が、わが国においては、死因究明制度の欠陥のために脅かされているという事実を思い出すこと、その現実の中で死因究明に尽力してきた法医学者をはじめとした専門家の苦労の歴史があるということ、そしてようやくいま制度的な変化が起こる中で、画像診断という手法が重要な役割を持ちつつあるということが見えてくる。放射線科医の読影の“目”を、一人の生者のためと同様に、一人の死者のために、ひいては社会の安全のために生かす機会が生まれている、いまそうした時代の流れの中にある、このように発想を転換することには少なからずの意味があると筆者は考える。

前置きが長くなった。今回筆者は、オーストラリア・メルボルンにあるVIFM (Victorian Institute of Forensic Medicine: ビクトリア法医学研究所) で開催された死後CTの講習会(2014年開催時)に参加する機会を得た¹⁾。VIFMは死亡時画像診断の症例数では世界最多を誇る施設であり、2005年以降、搬入されるすべての症例の全身CTを行っている。2009年にはビクトリア州で起きた原野火災において、世界で初めて大規模災害の個人識別にCTを施行した機関であり、法医放射線科医として世界的権威であるChris O'Donnell博士が顧問を務めている機関でもある。そしてメルボルンには「コローナ制度」と呼ばれる死因究明制度がありVIFMは司法に対して独立した法医学・法科学の専門的サービスを提供している。この仕組みは日本の死因究明制度との対比の中では、まぶしい理想と言っても過言ではないのでは

ないか。筆者が遠くメルボルンまで足を運んだ理由の一つは、まさにここにあった。死因究明に関して、世界で最も健全な制度の中で運用されている死亡時画像診断の現状、本質を見ることにより、現実的な死後画像の読影能力の向上はもとより、自分の目の前にある1つの画像を読影することがどのように社会の役に立つのかという想像力を根本から鍛えられるのではないかと、そうした思いがあった。以下、実際の講習会の内容について報告する。

レクチャーの概要

「Forensic Short Course—Postmortem CT Interpretation」と題された死後画像レクチャー(図1)は、メルボルンにあるVIFM(図2)において、2014年8月6～8日の3日間行われた。コースの対象は主に、死亡時画像診断に従事している、またはこれから従事する法医学者、およびこの領域に関心のある放射線科医とされており、画像診断の基礎から応用まで、体系的網羅的に学べる組み立てになっている。

講師は、VIFMの法医放射線科医であるChris O'Donnell先生を中心として、小児放射線科医、診療放射線技師、コローナなど、多彩な職種の専門家が異なる目線からの解説を行うというものである(ただし2014年時には、講師の一人であったVIFMの准教授David Ranson先生は、折しもウクライナ上空でのマレーシア航空機の墜落に関する身元確認作業のために不在であった)。